

維盛記



杉村敏郎

序章

これは今まで誰も語ろうとしなかった一人の男の物語である。男の名前は平維盛^{こへいもり}。小松内大臣平重盛の嫡男である。この男、保元の乱の翌年に生まれ平家の上昇気流と共に成長した。三才の時から父重盛に兵術と兵法を教わり十代の時より戦場に臨んだ。高麗出兵^{かうらいしゅへい}、延暦寺僧徒鎮庄^{えんりきしやうていしんしやう}、近江源氏との局地戦、源三位頼政^{みよたりまさ}追討等の戦での彼の戦績は輝しかった。そこには青春の全てを叩きつける無鉄砲な生き方があった。

されど治承四年秋、源頼朝が東国で挙兵し、その追討軍司令官として富士川沿いに北上し

た彼は甲斐源氏の頭領武田信義の軍団に完敗し武將としての未来を断ち切られた。富士の噴煙が灰色の雨を降らし、死の影におびえた飢えたる、兵達^{へい}は死人や犯した女の腹わたを食いちぎり、遠い太鼓の音に引きずられながら悲惨な末路をたどった。

無念の唇をかみしめ維盛は京に帰った。敗戦にも拘らず維盛は少将より中将に昇進した。この皮肉な結果は維盛をかえって腹立たしくさせた。彼は名誉と栄光の空しさを知った。

これより維盛の武將として一匹狼の歴史が始まる。それはつらくて長い旅路だった。

翌年の春、維盛は尾張にて源行家^{みなもとけい}をそして三河平原にて東国随一の騎馬戦術家で武田の実弟でもある安田義定^{やすだぎさだ}を撃破したものの、その武將としての評価は低迷した。おりからの飢饉^{うへ}より源平の主戦場は東海平野と北陸平原の穀倉地帯へと限定されて行った。戦は点の争いから線へ、さらに面へと拡張され、また線から点へと収束された。維盛も春は三河にて安田義定と戦い、秋には越前平野にて木曾義仲の先兵根井行親^{ねいぎやうしん}との戦に明けくれた。双方共に平家方の防御線を守り切るだけが精一杯で、敵陣営に楔を打ち込む事など不可能だった。

維盛も二十代の半ばを迎え、その横顔からは、昔の血氣盛んな表情が消え、彼が幼年時代にあこがれていた武將の姿、あの修羅場をかいくぐって来た勇者のみが持つ、どすの利いたしわがれ声と眼光、そして戦塵^{いく}のしみついた傷だらけの体を自身も身に付けてしまった事を悟った。しかしこの裏に潜んでいる数知れぬ苦汁の跡までは予期していない事だった。戦場に出る時は何時も甲冑をつけず、物静かで微かにニヒルな表情からぶつきらばう

な口調で淡々と物事を処理していく維盛を配下の武将達はこよなく愛していた。戦闘と武將達との作戦上の論争と敵の戦術の検討に終始している維盛にとって唯一のいいこいは、京にいる妻に書状を認める時だった。

維盛は小太りで足が少し悪い妻と二人の子供を心から愛していた。妻からの手紙には何時も子供の成長の事、そして彼女が飼っている五十四匹近くの猫の事、例えば生まれたまの猫がねずみにかじられた事とかふくろうの鳴き声が相変わらず恐いとか虫が沢山増えて ってい等と言う事が細かに述べられており、最後には必ず早く戦に負けて帰って来いと記されていた。これには維盛も苦笑せざるを得なかった。そして返事には何時も戦に勝つてばかりなのでまだ帰れないと記していた。実際そうでありたいと願いながら。しかし平家の統領宗盛は維盛の要求している兵力の半分もよこさず維盛は少ない兵力であてのない戦を続けるしか方法がなかった。このやりきれない立場から逃げる為に遊女を抱きながら酒びたりになりがちな日々が続いた。

季節が流れて寿永二年の春。統領の宗盛は

木曾義仲及び源頼朝追討のため四万騎の大軍を京に集結し、その指揮を北陸より召還した維盛にゆだねた。宗盛の計画はその大軍団を北陸道より信濃路を経て関東に進軍させるとの事。これは食料補給や統率上の諸問題で全く不可能だったが維盛は中将としての地位により、上級将官である宗盛の命令に従わざるを得なかった。当初の懸念にも拘らず維盛の進撃は快調に進み義仲方の降伏は時間の問題だった。しかし五月十一日、倶利伽羅峠にて維盛軍団は義仲の夜襲を受け敗走した。維盛はなおも敗残部隊を集結させ撤退途上、篠原、敦賀、湖北等の地点で義仲の進撃を死守したが、加速度のついた義仲軍団に悉く突破され、京に帰りついたのは七百騎足らずだった。義仲方に寝返った兵力は六千を数え、平家の時代は終焉を告げた。

宗盛は満身創痍で京にたどり着いた維盛に對し、刀を振りかざして死ねと命じたが維盛は聞かず、平家の最後を見届けると宣告した。平氏一族は京を去る決心をした。維盛も妻と二人の子供に別れを告げた。妻には左手の小指を切り取って与え、二人の子供には左右の

耳たぶを切って一つずつ手渡した。

「もし一年以内に私が帰らなかったら、庭のふくろうが私の化身した姿だと思ってなつかしんでくれ。いざさらば、」と妻に言い残して馬上立ち去る維盛の目から涙が止めどもなくあふれ出た。振り返るまいとこらえる維盛の背後より息子の六代の呼び声が追い打ちをかけた。維盛は馬にムチ打って一目散に走り去った。夜の静寂の中、馬のひづめの音だけが響き渡りそれは次第に消え去った。

その後、平氏一族は摂津福原の別邸を焼き払い幼い安德天皇を奉じて西国へと下って行った。長い流浪の旅路のはて、平家は九州にて体制を建て直し、政權奪回へと始動した。維盛にとつての戦いの日々がまたも訪れた。維盛は最後の力を振りしぼって立ち上った。彼の前面には多くの敵が待ち構えていた。



月見草の花が広野に咲き乱れる季節が過ぎ去り、おみなえしの花が野を埋める頃、平家は北九州より東への行軍を開始した。時に寿永二年九月の半ば。山陽道を東へ突進する平家の主力軍団の総指揮官は沈着冷静な左近衛

中将重衡、その前衛部隊長は能登守教経で彼は強引な戦術家だった。

所で維盛は一人群を離れ、四国の北岸屋島を拠点として水陸両用軍団を編成し、明晰な頭脳とドライな性格を持つ左馬頭行盛を副將軍に起用して、四国西部伊予に根拠地を置く河野一族とその兵団に戦いを挑んだ。彼らは果敢でずばしっこく又海戦も陸戦も共に器用にこなした。維盛にとつては新しい難敵だった。すすきの穂が風にそよぐ原野で多くの兵達が血を流した。又瀬戸内に沈んだ兵達もいた。

維盛が誰にも報いられない苦しい戦いを続けている最中に教経、重衡等が率いる主力部隊は播州平野に突入し、勢いに乗じて六甲連峰のふもと一ノ谷まで前進した。ここを拠点として平家は陣を構える事に決定し、維盛とその部隊は至急伊予より屋島を経て一ノ谷へと発行了した。それは平家が都落ちしてより半年後の事だった。暦は既に新しい年を迎えていた。

一ノ谷に倒着した維盛は同世代で長年の親友である重衡に四国での戦のつらかった事を

語った。重衡には維盛の苦戦がよく理解出来たし、又維盛の能力を平家の中では最も高く評価していた。又維盛も重衡の武将としての実力を認めていた。

「我々は二線級の武将ばかり相手でしたので楽な戦でした。維盛公には本当に申しわけない。今回は生田ノ森が源氏の主力との決戦場になるでしょう」と重衡。

「所で我々の敵は誰でしょう」という維盛の質問に重衡は多少面食ったが「武田信義です。彼は既に木曾義仲を滅し安田と共に京で待機中です」と素直に答えた。維盛の脳裏に一瞬にして四年前の悪夢が甦つて来た。青ざめた表情の維盛に重衡が語りかけた。

「どうです。武田と再戦しませんか、生田ノ森の指揮を維盛公が出来るよう私から宗盛公に説得している所ですが」とまで言つて重衡は急に口をつぐんだ。維盛にはその沈黙が何を意味しているか直ちに理解出来た。

「宗盛公は私では駄目だと考えておられるんでしょう。しかし武田と決着をつけねば私は気がすまない。これは私の武将としての業です。私にやらせて下さい」と重衡に告げて

維盛は去った。維盛の体の中から熱いものが湧き上り、それを何時までも押えることが出来なかった。冬の椿が維盛の目にしみた。

二

決意を新たにした維盛が陣地工作に従事している最中の事、一人の少女が現れた。少女の瞳は何時も海をみつめている様だった。全身から微かに潮の香が漂う。何の用だと維盛が尋ねた。少女は戦の手助けをしたいと告げた。「私の負け方がよほど派手過ぎた様だな。女に戦が出来る位なら私は宋の国を征服していたよ。とは言えもうあの国に名将と言える將軍はいないが」と苦笑まじりつつぶやいて維盛は傍の副將軍行盛を見やった。「少し試してみましよう」と行盛。維盛も軽うなづいた。女は播州の南端、網干の浜から来たと言った。父は土地の豪族で維盛と面接が有るとの事。維盛は試問を始めた。

「じゃ質問に答えろ。前面の敵は後退し側面の敵は迂回せり。その時の戦法は」と維盛「直進する」と女は答えた。正解だった。

「山の上に敵がいる。西から攻めるか東から攻めるかどっちだ」と維盛。「東だ」と少

女は答えた。維盛はげんな表情で行盛を見やった。「行盛公、三略や孫子を丸暗記すればこれ位簡単にわかるが、この女どうする」

「眼付を見た所、多少は戦を知ってる様です。それに維盛公、貴公は今疲れている。あの少女は十五、六才でしょう。あの年代は全て感覚で物事を処理しようとし、まだ幼児性も脱却していません。又情感的にもさほど成熟していませんが我々には特有の想像力と発想を持っています。それが今の貴公には一番必要なのです。悪くはないでしょう」と行盛。

女の名前は播磨。確かに彼女には、デカダンスと新興宗教の間を彷徨している様な京の女にはない精気があった。それに京の女とは愛に対する姿勢も少し違った。京の女としての愛は受身だったが、しかし播磨にとつて愛は与える物だった。それで満足していた。そして播磨は風変わりな想像力を有していた。彼女は遠い星から来た物体を見た事があると言った。その中から奇妙な物が出て来た。それが他の星の人類だとの事。他にも空とぶ牛や、海中の怪物も見たとする。この

荒唐無稽な話を聞かされた維盛は、恐らくそれは少女期特有の不安な心理が招く妄想だろうと考えた。夢を見るのは誰だって自由だしその人間が気違いだという事にはならない。

「兄者、あの女の言ってる事は全部嘘かも知れないぜ。それに彼女の作った歌は皆盗作だし、そうでなくっても五十年前の技法だよ。

女は男に愛されたい時は誰だってうそをつく。少しは気をつけるよ」という弟の資盛の忠告を維盛は否定した。

維盛は心の中でつぶやいていた。俺は戦をやり過ぎた。体も心もボロボロになってしまった。もう一人では何も出来ない。誰かの助けなしには。確かにこの頃の維盛は真夜中に夢か現か定かではないが亡父の重盛とよく会う。維盛が話しかけても重盛は微笑を浮かべるだけで何も答えようとしなかった。

「父上、私は愚かな武将でした。多くの兵達を殺して来ました。父上、私はもう耐えられません。早く父上の所へ行きたい。私はもう疲れはててしまいました。父上」とつぶやいた維盛の目の前に播磨がいた。播磨は維盛の額の汗をぬぐった。維盛は播磨の肌から伝わ

る何かを求めながら次第に深いねむりに落ちて入った。夢の中、摂津葦屋の重盛の別邸より浜辺に引きずり出された幼年時代の維盛が潮風の冷たさに耐え切れず重盛に抱きついて自身の姿が甦ってきた。維盛はその思い出に身をまかせた。

三

その頃、京では復活した平家が東西三里に跨る一ノ谷に拠点を構え陣地工作を着々と進捗させているとの事、又源氏の主力武田軍団を一ノ谷の東の城戸口生田ノ森にて迎撃すべくその指揮官を選考中との情報が伝わっていた。京の街角ではこの指揮官に誰が起用されるかその噂でもちきりだった。彼等の心の中では次第に平家に対する悪感情は消え、なつかしく又その不在を寂しく思う様になっていった。しかし、今までに見た事もない巨大な投石機（カタバルト）が砂塵と共にあたかも大地を引き裂く様な音を轟かせて街路を通過し、又鍛えぬかれた肉体と激しい気性の持主である東国武士達の姿を見せつけられた彼らは、この戦の激烈さを想像して心の底から震え上がった。平家にゆかりのある人々にとっては

なおさらだった。

やがて生田ノ森の指揮官には山陽道で数多くの戦果を上げた本命の能登守教経を蹴落として維盛が起用されたとの知らせが伝わった。又この命令を鼻歌まじりで気楽に受領した維盛を見て頭に来た教経が維盛に食ってかかり、二人は激しい口論の末に双方共に刀を抜いて斬り合いになるかと思われた所を周囲の武将達があわてて止めたとの情報も伝わり京町衆を不安と動揺におとし入れた。彼らの間ではこの人選に対して賛否両論だった。もう維盛ではだめだ、いややはり平家の切り札は維盛以外にないという意見が相半ばしていたが、一ノ谷に向けて続々と発進して行く武田の軍団を見ているうちに彼らの心の中に次第に維盛に対する微かな期待とそれを遥かに上回る同情の念が湧き上ってきた。

所で当の維盛はそんな事とは露知らず生田ノ森の宿舎で一ノ谷周辺の凶面に見入っていた。今さら作戦を練っても仕方ないさと開き直った心境だった。そこへ前ぶれもなしに弟の資盛がやって来た。資盛は源氏の支隊安田義定の部隊を丹波よりの侵入路である三草山

にて迎撃する部隊の指揮官に任命されていた。鋭敏で平家の中では最も賭博師的要素の強い武将だった。

「兄者、久し振りだな」と資盛は呑気な口調で維盛の前に座った。「敦盛とまたいざこざを起しているようだな」と維盛。資盛は苦笑した。「あの女の事か。軽くあしらうには良い奴だったが敦盛にくれてやった。奴は年頃だからな、欲求不満で暴られるよりはましさ」と資盛。

所でこの資盛とその妻である建礼門院右京大夫との関係には少し異常な所があった。

話はさかのぼって治承四年十一月の事。敗軍の将として東国より帰ってきた維盛と入れ違いに資盛は伊賀道方面の近江源氏を追討すべくその指揮官に起用された。資盛が、夜を徹して作戦計画を完結させ、いざ出陣という前夜の事、彼は妻と、尽きないなごりを惜しんでいた。その時の妻の様子が常でない事を資盛は察したが、意に介さず、妻を抱いていた。しかし夜半、資盛は激しい悪寒におそれ突如として血を吐いた。助けを求めた当の妻が短刀を握りしめて資盛に斬りかかって来

た姿を見たがそれからの彼には意識がなかった。後で彼は妻が毒空木の実を彼にだまって食べさせた事を知った。彼の妻は異常な独占欲から戦場で彼が死ぬ位なら自身の手で殺してしまおうと画策していたのだ。それ以来、資盛はその後遺症に悩まされ、数日に一度は激しい頭痛と手足のケイレンにおそわれ、結局彼は予備役の将官として戦場で戦果を上げる機会を奪われたまま現在に至っている。

「所で前妻は今どうしているんだ？」

と維盛は資盛に尋ねた。資盛の顔にかげりが走った。「わからん。食いつめて遊女になってるかも知れん。……兄者、俺はあいつを何回殺そうと思った事か……しかし俺には出来なかった。自分でも馬鹿だと思っている……恐らく死ぬまであいつの事を愛しているだろうよ」と言って資盛は自嘲の笑いを洩らした。維盛は資盛が愛の世界で払った犠牲の大きさを察して胸が痛んだ。それは維盛自身が戦の世界で払って来た犠牲に対応するものだった。二人は共に青春の傷跡を引きずって生きていた。それがこの二人を固い絆で結んでいた。

「すまん資盛、悪いを聞いてしまったよう

だ……所で三草山の方の状況はどうだ」と
維盛。資盛の表情に生気がよみがえって来た。

「いくつか手は打ってある。けもの道を切り開いて擬装道を四つばかり作った。三草山に通じる道は木を切り倒して一定間隔で閉塞してある。安田の奴が何処にまぎれ込むか面白いぜ」と言つてほくそ笑んだ資盛の表情はガキ大将そのものだった。

「ふむ、狙いとしては悪くないな。しかし安田という男はそんな子供だましの手を通じる相手ではない。所で陣地の形態は？」と維盛。資盛はしばしむくれていた。

「後漢時代の古戦史から考へつたんだが、縦深防御の形にしておいた。アリ地獄と同じ原理さ、安田は左右のゆきぶりが下手だから、この戦法で叩きつぶしてやろうと思つてゐるんだ。名案だろう」と得意気に資盛。しばしの沈黙の後、維盛が口を開いた。

「確かにあいつは線状戦術しか出来ない男だ。武田の様に斜状攻撃や敵の意表をつく様な陽道作戦を仕掛けたりと言つた奥行のある戦は出来ない。しかしあいつは戦闘中に於ける進行速度の持つ破壊力をよく研究しつくし

ているよ。これからの時代の戦闘様式をいかに発展させていくかという問題の上に立脚すればあいつの戦術は十分に研究の余地ありだな。あいつは現代に於ける戦闘形態の流れを大きく変革させるだけの可能性を秘めている。又誰かがそれをしなければいけないと思うよ」と維盛。資盛が手を振つた。

「兄者、俺の敵をそんなにほめないでくれよ。戦がやりにくくなるじゃないか」二人は顔を見合せて大声で笑つた。それからの二人は前漢以来の中国の武将達の戦法を片っ端からこき下ろしていった。この二人は何時もこの様にして互いの武将としてのプロフェッショナル意識を確認しあうのが常だった。それはこの二人にとって最も幸せな時だった。「夜襲にだけは気をつけろよ。夜は射撃の命中率が落ちるからな」と維盛は去り際の資盛に忠告した。「恐らくそうなるだろうし、その備えとしての訓練も十分しているよ」と予言して資盛は去つて行つた。

四

季節は二月に入り、冬の色が全てをおつた。馬のひづめが凍つた雪を蹴散らし、瀬戸

内より吹きつける風が兵達の鼓膜に突きさす様な痛みを与えた。六甲連峰が白い衣をまとい、生田ノ池に氷が張つた。

田ノ池を走りまわつていん所へ、本陣から播磨が素足で生田ノ池を走りまわつていん所へ、本陣から帰つて来た行盛が馬上通りかかった。行盛が手招きすると播磨は走り寄つて来た。行盛が投げたミカンを片手で受け取り播磨は皮もむかずにかじつた。播磨は食べ盛りだった。

「行盛、維盛は勝てるの？」と播磨。この素朴な質問に行盛はしばしためらつたが「はつきり言つて今の平家の戦力では戦にならない。武田に対してどれだけ抵抗出来るか、それが精一杯の所だろう」と彼も素直に答えた。「しかし維盛は強いんだらう」と播磨はなおも食ひ下つた。しばし黙考の後、行盛が口を開いた。「確かに維盛公は武将として必要な判断力と勇氣、それに洞察力を全て兼ね備えている。しかしあの人には足りない物が一つだけある。それは運だ。だから彼は名将になれないだらう。しかし平家では最も優れた將軍である事には間違いないだらう」と行盛。播

磨はこの答で多少納得した表情だった。

生田の宿舎に着いた行盛と維盛はさっそく作戦会議を開いた。「平家の総兵力は現在四千と五百程です。我々の要求した三千騎の兵力はけづられて、結局二千騎しか維盛公にはつかない様です。と行盛。「それは一体どういう事だノ」と一喝して維盛は険しい表情になった。「実は宗盛公が我々の知らない間に新しい作戦を立案している様なんです。つまりその作戦というのは、維盛公を武田に対する防壁にして、その間残りの兵力を屋島に撤退させ、その部隊を海路和泉の国に上陸させ源氏の後方補給線及び連絡線を遮断して一挙に京へ突入しようという計画なのです。要するに維盛公にはその作戦の犠牲として死んでほしいという事なのでしょう」という行盛の説明を聞いた維盛は笑い出した。

「それは名案だ。全く最高だ。しかしまるで現実離れのした作戦だな。宗盛公の立案する作戦は確かに狙いは面白い。図面を見て観念だけで戦が出来るのなら確かに彼は名将だろう。私も俱利伽羅峠でこりたが、彼の作戦はまったく机上の空論だ。一体彼はその場合、

海上に於ける潮の流れや、風向き等を計算に入れてるのかね。それにたった二千騎じゃとても武田を防ぎきれないよ。武田の兵力は三千五百。もう既に京を進発した。それに資盛の守っている丹波よりの侵入路である三草山は地形からして防ぎようがない。石弓すら仕掛けられん。その上長年戦場から遠ざかって

いるので資盛自身いくら鋭敏だといっても判断力がさびついてしまっている。今の資盛では安田どころかその弟子の義経相手ですら勝てんよ。要するに我々は一ノ谷を守りきる事すら出来ん。平家が壊滅してしまつてからでは渡洋作戦も何も話にならん。まるで夢物語だな」と言う維盛の言葉に行盛も当然ですとうなづいた。「ともかく二千五百の兵力は確保してくれ。二千なら私は指揮官を下りる。

この作戦に私の名を残す事は出来ない。私はもうこれ以上弱将として後世の歴史に汚名を残すのはこりごりだノ」と維盛は吐き捨てた。行盛はしばし眉間にしわを寄せて考え込んだ。行盛には維盛の心境が痛いほどわかった。しかし平家のこれからの運命を考えた場合、維盛を人身御供にする以外、生き延びる

道はなかった。彼は維盛がこの困難な役割を引き受けざるをえない立場に立つべく説得すべきだと心に決めた。

「素直に言いますと、宗盛公は海上で源氏との勝負をつけるつもりです。この戦にはあまり乗り気ではありません。やはり我々陸戦家を一人も信じてない様です。あの人は本来海戦家ですからね」とすつとぼけた表情で行盛。確かにこの戦の平家方の指揮官は皆俱利伽羅の生き残りだった。タフだが押し一手の単調な攻撃しか出来ない通盛、明敏だが強引さに欠ける歌人忠度、強引で無鉄砲なだけの教経、天才だが戦嫌いの経正、見込みがあると思つた知度は俱利伽羅峠で戦死した。指揮官の質という点では確かに源氏にひけをとる。まともに勝負が出来るのは維盛と重衡以外にはいない状況だった。「重衡公が海上からの側面攻撃をかけてくれるという話は？」と維盛。「それは無いと思つて下さい。屋島へすぐに撤退する為にしか船は使えせん」維盛は軽く微笑して行盛に酒をついだ。維盛は暗黙のうちに行盛の意図している事がわかった。笑いでそれを承した。

「義仲の奴も死んだな」と維盛。「確かに強い武将でしたね。しかし京の女との恋の駆け引きで骨抜きにされてしまったんでしょ。京の街は情緒のるつぽです。そこでは情緒という名の雨が毎日降っています。義仲の様な乾いた心の持主にはそれが見えなかったのでしょう。それが彼の敗北の原因かもしれない」と行盛。維盛は実務的な姿勢をくずさない行盛の見知らぬ面を見て微かにおどろいた。二人は維盛が北陸及び三河で苦しい戦をしていたところから共に戦って来た仲だった。父を早く失った行盛には、維盛にないスレた面があった。それが直情経行な維盛の足りない所を上手く補っていた。

「行盛公、私は海の見える所で死ぬそうだ。北国の海よりやはりこの海がよい。この土地の風が私は一番好きだ。心の中のいやな物を吹き飛ばしてくれるよ」と言った所へ伝令が駆けつけて資盛の敗戦を二人に告げた。昨晚、資盛軍は安田の騎馬戦隊の急襲を受け防ぐ間もなく壊滅したとの事。資盛は戦半ばで逃げ、馬上丹波山系を縦断し、高砂の浜より命からがら沖合の船に飛び乗り屋島に去つ

たとの事。「私の予測より三日も早過ぎる。安田の不意打ちだな。しかし資盛め、逃げ足の速さを戦に使ってたら名将になったのに」と維盛。行盛もうなづいた。伝令が何かを言おうとして去りかけた。「どうした」と維盛。「師盛公が義経に首をはねられました」と伝令が告げた。維盛は盃を落とした。

「あいつはまだ十三だノ何という卑劣な事を……」それ以上何も言えず維盛は頭をかかえ込んだ。

播磨が帰って来て、「どうしたの?」と、維盛に尋ねた。立ち上がった維盛は「弟が死んだ」と言つて、咄嗟に播磨の横顔を殴った。播磨は口から血を吹いて床の上に昏倒した。維盛はうめきながら外に飛び出した。行盛が倒れた播磨を抱き起こした。「すまん播磨。お前の若さが維盛公には耐えられなかつたんだ」と言つた行盛の腕の中で播磨は氣を失つていた。

五

飛び出した維盛は二人の従者と共に馬上、一ノ谷の本陣に向つた。木枯しが維盛の顔を打ち馬の吐く息が地面を叩いた。本陣では兵

達がごった返しており、夕陽が潮風と共に全てを夜の誘惑へといざなつた。

維盛は浜辺の遊女達の巢窟に潜入し女をあらさつた。侍同士が女を奪ひ合つて激しくのしり合っている。その様な光景を横目に見て維盛は一人のうなだれた女に声をかけた。女は維盛の手を引き自身の寝所に案内した。女は酒を出し維盛についだ。維盛は女の過去を尋ねた。女はただ一言。京で悪い男にだまされたと言つた。とろんとした口調から女が京の貴族の出身らしい事を維盛は察した。維盛が何か流行り歌を歌えと言うと女は琵琶を出して来て富士川合戦や俱利伽羅峠に於ける維盛の敗戦を主題にした歌を唄った。維盛は自身が徐々に過去の人になりつつある事を悟つた。

「維盛殿は今どうしていられるでしょうか?」と女は本人である維盛に当人だとは知らずに尋ねた。「死んだ」と維盛が答えると女は涙を流し維盛が昔、京の女達の間でどれだけ騒がれたかを話し出した。事実、維盛は桜梅少将とうたわれ京の女性達の間では上下を分たず大変に人気があつた。維盛がそれを止めて

女の細い肩を抱きしめた殺那、外で女の悲鳴がした。

甲高い笑い声で、能登守教経が女を斬り殺した事がわかった。「喧嘩屋め」と維盛は吐き捨てた。維盛は教経が嫌いだった。手当り次第敵を求めては攻撃する。彼の戦法は兵法の正道から外れていると維盛は常に批判していた。という維盛の戦法も反則だらけだった。維盛自身は己の戦法には理論的裏付けがあると信じていた。いや、そう信じ込ませていた。

女は維盛の腕の中で震えていた。「こわい」と言つて、女は維盛にしがみつき、泣きだした。維盛は女の首すじに手をあて、その指先を衣のすき間から女の乳房の上にすべり込ませた。女の体は細かったが適度にしなやかで維盛の愛撫に敏感に反応した。女の香りが浮き上り女の体に波がおそった。女の吐息が維盛の頬を微かに打った。

いつまでも放そうとしない女を振り払つて維盛は外に出た。入れ違いに荒くれ男がはいり、男の蜜声と女のやりきれぬ笑い声が維盛の心に突きささった。空ろな表情の維盛を見

た武士たちが「馬鹿野郎！」と維盛にどなった。維盛は教経の取り巻きだと察して意に介さず苦笑してその場を去った。

六

行盛の奔走が効を奏して、維盛は二千五百の兵力を確保する事が出来た。しかしそんな事をしても既に焼け石に水だろうと維盛は予測した。優秀な武士達は義仲との戦いでほとんど死んだ。

そして、合戦前夜。播磨はとくさで、維盛の刀を磨いていた。維盛はその傍で横たわっていた。維盛は心の中でつぶやいていた。私自身の悪夢が、私を殺しに来る。この四年間、私は悪夢から逃げる為だけに戦つて来た。その間、妻やその他の女性を心から愛した事があつただろうか。妻を抱いている時にも私の脳裏から、武田流陣太鼓の響を消す事は出来なかった。トコトコトントンドコドン……。

「播磨こっちへ来い」と呼んで維盛は播磨を抱きしめ、その乳房に耳を当てて他の音を聞いていた。しかし払暁、それは現実の音に変わった。行盛が駆けつけ武田の襲来を告げた。維盛は例のごとく甲冑も付けず外に飛び出し

た。「俺の死体と一緒に椿の花を埋めてくれ。あの世で会おう」と播磨に告げて。

維盛は見た。冬枯れの原野の彼方、武田軍団が地鳴りと共に陣太鼓を響かせ、着実に維盛に接近するのを。維盛の心の中を恐怖ではなくある種のなつかしさがよぎった。しかしそれは再会と呼ぶにはあまりにも皮肉すぎる状況だった。

「総員配置に着け！」と号令し維盛は指揮刀を振りかざした。同時に平家の陣太鼓が激しく打ち鳴らされ、その旗印である揚羽蝶が一勢に躍動した。皆な死ぬだろうと維盛はつぶやいた。

戦いの火ぶたは切られた。武田の精鋭騎士団第一波突撃は平家の石弓部隊、弓の狙撃部隊の一勢射撃を食つて全滅した。足を折られ射抜かれた馬が地上に昏倒し、いななきながら血を吐いて死んだ。突破口から突入した馬は長刀で足を断ち切れ、馬上の騎士も共地上に叩きつけられた。この戦果に氣をよくした副將軍行盛は、敵陣への中央突破を敢行すべく騎馬隊を編成した。平家の陣は生田川沿いにしかれており、上流よりゆさぶりの為

圍部隊を先発させ、頃合を見計らって発進させた。しかし武田の守りは固く、全て屍を野にさらした。行盛は悔し紛れに甲を地面に叩きつけた。この一瞬のスキについて武田は平

家陣の両翼より突撃を始めた。平家の防衛線は分断され、維盛の督励にもかかわらずその前衛は次第に後退した。兵が馬に蹴られ踏まれ切られて死んだ。片腕の者は片腕で戦い、死にかけの者は齒でかみついた。全て生ある者は戦い、死にたる兵達は魂の世界で戦い続けた。しかし背後の本陣よりつい火の手が上がり平家の敗北は決定的になった。行盛がやむなく退却命令を出そうとしたが維盛はそれを止めた。「私の最後の時が訪れたようだ」とつぶやいて維盛は十騎計りの護衛と共に敵陣めがけて突入した。

維盛は刀を前方真一文字に構え敵陣内を直進した。潮騒が微かに響いた。武田信義の姿が維盛の前に出現した。維盛は意を決して着実に武田に近づいていった。敵は何もしなかった。武田が手招きした。理知的な技術者といった表情の男だった。

「私が敗軍の将です」と維盛が名乗り出た。

二人は初対面だったが維盛にとつては十年來の旧友の様な気がしてならなかった。

「武田信義です。維盛公、昔と変わらず激しい戦をしますね。今まで一番手応えのある戦でした。貴公は名将です。維盛公、貴公は私に負けたのではない。時の流れに負けたのです。すでに大衆は平家の旗印揚羽蝶を見た所で誰もなびかない」と武田。

「しかし私は平家の人間として最後まで戦わねばなりません。これが武将としての宿命です。しかし最後の敵が武田殿だったので私は安心して死ねます。もう思い残すことはありません。これが私の愚将として唯一の誇りです」

「維盛公、我々東国の武士は大地と共に生活します。自然を開きそして田畑を耕します。そして収穫の時は自然の奥に存在する何か神

の様な物に感謝します。我々は大地に根をはやし雑草のように生きています。そして子孫の為に死に、土に帰ります。最後には大地に帰って行くのです。それが自然の摂理というものです。しかし平家にはそれが無かった。

平家は虚飾の花です。それは美しい。しかし花の命には限りがあります。何時かは滅びる

時が来ます。維盛公、私は花なら花なりに最後まで戦われた貴公を尊敬します。頭を下げるのは私の方です。貴公を殺したくない。我々の国、甲斐に来て頂きたい。家族でいらっしやい。弟の安田もきつと歓迎する事でしよう。所で貴公の実力は頼朝も認めています。もし良ければ私の副將軍として共に奥州藤原一族を攻めましょう。それに貴公の後見人である頼盛公は既に鎌倉に来ておられます」武田のこの申し出を維盛は断つた。

「私は平家の人間です。平家と運命を共にするのが私の義務です」そう告げて維盛は去ろうとした。武田が背後より「維盛公、死んではいけません」と呼びかけた。維盛は軽く会釈して走り去った。維盛は自身が人間としても武田に負けた事を悟った。

戦場は死体や千切れた手足が散乱していた。引裂かれた揚羽蝶が平家の姿を象徴していた。生田に帰ると行盛が一人むせび泣いていた。維盛は軽く慰めて播磨の姿を探し求めた。生田ノ池に乳房をえぐられた播磨の死体が浮かんでいた。維盛は棒の枝を折ってその上に投げ、その場を後にした。

終章

今にも沈んでしまいうような小船にゆられて、維盛は屋島に帰りついた。資盛が浜辺へ出迎えて来ていた。二人は手を握って再会を祝した。しかし共に胸中複雑だった。

「兄者、いい戦をしたようだな。うらやましいよ」という資盛の表情に痛切な敗北感と弟の師盛を見殺しにしたという自責の念がありありとかがわれた。維盛には資盛の気持ちがいまいほど理解出来た。「下手な戦をした後は誰だっていやなものだ。お前の場合には相手が強すぎたんだ。気にする事はないよ」と慰めて維盛はその場を去った。

数日後、行盛が来て維盛に一ノ谷の戦死者名を告げた。維盛はその名を聞き衝撃を受けた。その名は、教経、通盛、忠度、敦盛、経正、知章等十名。しかし維盛にとって最も大きな打撃は彼の唯一の理解者であり心の友だった重衡が捕えられたという事だった。維盛は落胆のあまりしばし口もきけなかった。

「結論として、これからの平家の総指揮は

維盛公に全てゆだねられているという事です。もう戦の出来る人は残っていません」と行盛。

「確かに知盛公や資盛では無理だな。しかし、もう私一人の力では手のほどこしようなない。平家にはもう戦が出来るだけの戦力がない」と言って維盛は手を振った。

「しかし既に宗盛公は河野一族討伐隊の司令官に維盛公を起用する事を決定しています。恐らく私が副將軍に任命される事でしょう。どうです引き受けていただけませんか？」という行盛の申し出を維盛はしばらく考えさせてくれと言った。

維盛は屋島より去ろうと思った。維盛は悟っていた。一ノ谷の決戦でもう彼の武将としての炎は燃え尽きてしまったのだと。私の武将としての生命はもう終った。これからは行盛や資盛達の時代だ。彼らに後を託そう。そう維盛は心の中でつぶやいていた。

その日の夜、維盛は資盛の所へ別れを告げに行った。しかし資盛は例の後遺症の発作におそわれており、頭を抱えて床の上を半狂乱の状態でのたうち回っていた。数人の従者が汗だくでそれを押え込んでいた。維盛はこの

光景の悲惨さにたまらず目をそむけた。維盛は一人の従者を呼びよせて資盛の容態を尋ねた。「最近、衰弱がとみにひどくなっています。後一年位の命でしょう」と従者は答えた。維盛は胸をかきむしられる様な思いでその場から走り去った。

翌朝、小雨が降りしきる中を維盛は数人の従者を引き連れて屋島の浜辺より船に乗り込んだ。船が浜辺よりすべり出し、しばらくして振り返った維盛のひとみに、地面をはいつくばって浜辺に近づく資盛の姿が写った。

「兄者、私を置き去りにして何処へ行くのです！」という資盛の絶叫に維盛はたまらず耳を押えてうづくまった。資盛はなおも海の中にのめり込んで絶叫した。維盛は激しく鳴咽した。しかし船は次第に沖合に進み資盛の姿も見えなくなった。

それからの維盛については定かでない。その年の三月二十八日、熊野沖で入水自殺したと言われているが、その確証はない。これは歴史上永遠の謎の一つである。しかし過去に於いて、戦いに生きそして戦いに全てを捧げた一人の男がいたという事実には変りはない。

(すぎむら としろう 昭和五十二年本学卒業)